

作東の文化

No.
38



作東文化協会

作東の文化

No.38



手芸 岸 本 す満子・原 田 豊 子
西 坂 暁 子・妹 尾 さと子
野 村 啓 子・松 本 教 代
藤 生 巨 子

平成24年10月

目次

巻頭言

自戒の記……………谷口重人……………1

特別寄稿

心の糧……………里見明……………2

水車と鳳仙花……………岡田千茶……………3

所感寸言

私は世の人たちの為一言書き残す

悪役……………江見英雄……………6

老いのたわごと……………吉政實夫……………8

芽生え……………井口祥子……………9

随筆随想

金色の光……………井上健一……………11

この道はいつかきた道……………長瀬加代子……………12

世の浪人の為に……………江見英雄……………13

そして…春が……………岩本全子……………14

作東文化協会の研修旅行に参加して

一人暮らし高齢者への支援に感謝……………内藤善晴……………15

断捨離……………小林醇子……………16

大切な手紙……………加藤美雪……………18

歴史紀行

むかしからの往来を辿る―杉坂峠と萬能峠の坂越え―

不思議なる縁……………春名正昭……………21

美作市「杉原弥生墳丘墓」は美作古代史を明かす大発見

加藤芳英・春名倫子・安東奈穂子……………22

江見神社の由来……………宿野喜一……………23

江戸地区の文化財めぐり……………光井和彦……………29

短文芸

俳句

若葉雨……………山本登山……………32

風の幣……………沖田はるみ……………32

良夜……………高橋やえ子……………33

柿若葉……………井口祥子……………33

春の雪……………山本靖子……………33

折にふれ……………杉本幸子……………33

農婦の四季……………真野雅子……………34

蝸の宿……………樽井清江……………34

亥ノ子唄……………春名静山……………34

花菜風……………下山紀子……………34

江見駅……………加藤美雪……………35

旅……………春名はるを……………35

古城……………坂部金治……………35

題字
真野みよ子

老いても	清田三智子	48
老いの日々	野沢老梅	48
豆植ゑ	藤川亜也	49
峡の田	井上さかゑ	49
包まれをりぬ	藤本伸子	49
傘寿の手習ひ	名部通子	49
田舎暮し	大内佐智	50
暑い	内藤慶子	50
天使の響き	池田保子	50
さくら	船曳文子	50
思ひのままに	末宗千歳	51
米寿をむかえて	加藤保子	51
夫病みをりて	阿部すみゑ	51
愛無きが如く	角利津	51
踏み出す一步	角南三津ゑ	52
淋しさもある	黒石登代	52
悲しみとなり	北村和子	52
梅雨晴れ	中川富美枝	52
日食	長澤和枝	53
寒梅	福島美智子	53
陽炎	日下智加枝	53
子の結婚	浜田くに子	53
今はあり	入矢敏江	54

若葉道	青山元江	35
谷若葉	香山秀子	36
若葉萌え	豊田絢子	36
四季の詞	青山美和子	36
暑さ	榑井悦子	36
裏山の古木の大本	森本久子	37
川柳		
二度童	春名静山	37
山家川美しく	江見英雄	37
欲	山本登	38
日々是好日	衣笠隼巳	38
足	山本昌子	38
秋	遠藤栄	38
生きる	太田智子	39
古稀	原洋一	39
短歌		
雁字搦め	坂井はつ子	40
一つとなりて	梅本信恵	40
菜の花広がる	安東奈穂子	41
祖と共に	山下光子	41
四ツ塚一五〇年祭近し	江見英雄	41
旧友	春名静山	41
ながらへて	新免初子	42

里の夕	豊田絢子	42
声	松本哲夫	42
我一人なり	小林潤朗	42
寒あやめ	加藤幸子	43
八十路になれば	杉本幸子	43
実直に正見	加藤芳英	43
スカイツリー	山下三代子	43
獣らと	有元理嘉子	44
孫娘	原田順子	44
暮しし町よ	横山美恵子	44
梅も桜も	宿野和穂	45
ゆるわれの幸せ	新免三代	45
金環食	小林洋子	45
をりをりに	加百由紀子	45
わが村	新田千晶	46
夏は来たりぬ	末宗玲子	46
小さき蓬	黒石初江	46
蟬	松井洋子	46
つながり	丘野道子	47
九十八年	森本久子	47
出番待ち	名部みどり	47
早春	安西苑	47
曾孫	光井房子	48

霧深く	三浦智江子	54
今日もまた	関内惇	54
グループ活動		
作東の短歌会		56
白雲書道会		57
平成23年度 作東文化協会決算報告		58
平成23年度 作東文化協会事業報告		59
作東文化協会グループ紹介		61
作東文化協会会則		65
平成24年度 作東文化協会会員・役員名簿		67
編集後記		78

表紙説明

題「花友達」(洋画)

赤紫のリンドウに、ある花屋さんで出会い、虜になりました。茎の頂きや葉腋にも数個の花をつけている。でも平開しないで上向きにすまし、ほほ寄せ合っている姿。何をおしゃべりしているのだろう。思わず顔を耳を近づけてみたくなりました。下からパンジーの花が、「仲間に入れてよう」とお願いしているような花の世界、可愛くて楽しそう。そんな思いで画いてみました。

安東眞江

「巻頭言」 自戒の記

会長 谷口重人

まもなく二年任期の二期目、四年を終えようとしている。この間、何件かの新提案をさせていただいた。

例えば、文化展に出品された作品を地域内の皆さんにできるだけ安価に提供することによって、どの家庭を訪れても玄関や壁面に額縁のある町づくりができるのではないかと。また、会員募集を担当して下さっている評議員の方々にいくらかでも報酬を差し上げることによって会員の増加が望めるのではないかと。しかし、理事の方には慎重論が多く、実現には至らなかったのですが…。

今、協会の一番の悩みは会員数の減少にあります。平成十三年、一〇六八人をピークとして年々減少を続け、二十四年は八一九人となりました。過疎・高齢化という時代の流れには逆らえないのかも知れませんし、多様化する若者達のニーズに对应されない協会の体質があるのかも知れません。

いずれにしても、この変わり者の会長が四年間、何とか続けてこられたのは理事会の皆さんを初め、多くの会員の支援のためであり、改めて深く感謝を申し上げて、最終稿とします。

特別寄稿

心の糧（いつでも心の準備を）

里見 明

（書家 特別顧問）

1 明日死んでもいいように

2 百まで生きてもいいように

3 今日を精一杯生きていく

4 食べたものは食べておく

5 行きたい所へは行っておい

6 逢いたい友は逢っておい

7 足腰立って動けるうちに

8 明日に思いを残さぬように

の八項目である。題して「いつでも心の準備を」である。こんなことを考えるなんて、私自身そろそろ人生の終わりに近づいたからかも知れない。これまでの人生の中で、楽しく、自分勝手に暮らせてくれたのには、どれだけ多くの皆さんに支えられ、どんなにか元気づけられてきたことか、ことばには言い尽くせないものがある。感謝感謝である。

さて、前述の八項目の1～8までであるが、裏から見れば、どれをとっても、いざ実行となれば、たやすいものではない。

1. そんなに簡単に整理はつくもんか。
2. 病院のベッドの上で生きていたって…
3. 朝から晩まで緊張が続くもんか。
4. そんなに食べられるもんか。
5. 杖をたよりで遠くまで行けるもんか。
6. 逢いたい友も日を逐うて少なくなつて。

旅先で目にした店内での額、書軸・売店のタオルに印刷されたことば、その他思わぬ所で見つけた名言・格言を集めて私なりの「心の糧」としている。その一つが前述

7. 脛や腰も日に日に痛くなって。
 8. したいことは山ほどあって。
- 名言・格言も、心ではあせてはみても、老いの身とも

水車と鳳仙花

岡田千茶
(朝日新聞岡山柳壇選者)

なれば実行は至難事である。それは「夢」に近い。しかし、「夢」とは追い求めるものであり、実現に向かって一歩一歩少しでも近づくように努力すべきものではなからうか。

夏から秋にかけて咲く鳳仙花には思い出がある。幼馴染のM子のことである。彼女は私と同じ年、遊ぶことの上手な少女だった。

よくままごとの相手をさせられた。鳳仙花が咲くと、花弁を摘んで水に溶かし、色付きの水を作って、化粧品空き瓶や薬瓶に詰めて遊んだ。父親は気難しい人だったが、出稼ぎに行くことが多くて、家は小母さんと四人の女の子だけになり、遊びやすい家だった。

ある日、M子方へ行ったら丁度昼食をしていた。丸い小さな卓袱台を囲んでいたが、台の上には井がひとつ。井には梅干しがだぶだぶする程の醤油の中につかっけていて、他にお菜らしいものはなかった。それを旨そうに食べているのを見て欲しくなり、家に帰って作ってくれと言ったら、祖母が、

「何処のそがいなものを食べよんなら」と言いながら作ってくれた。昭和も戦前の私たちの子供時代は、世間一般が貧しかったが、M子の家もひどかったと思う。今にして思えば、父親の収入も充分ではなかったであろう。夏が来て鳳仙花が咲くと、M子の作った水の色と、あまり笑顔を見せない、大人しい彼女の表情が浮かんでくる。

もひとつの幼い頃の話。それは

「水車小屋戸が開いていて一人いる」という川柳を読んだ時のこと。

米を搗くか粉を挽いている水車小屋の戸が開いていて、立ち働いている人が居る、という何でもない句であるが、水車小屋と働いている人と、辺りの風景まで見えてきて、さらりとした中に味わいのある句だ。

これを読んだ途端、子供の頃の記憶がよみがえった。

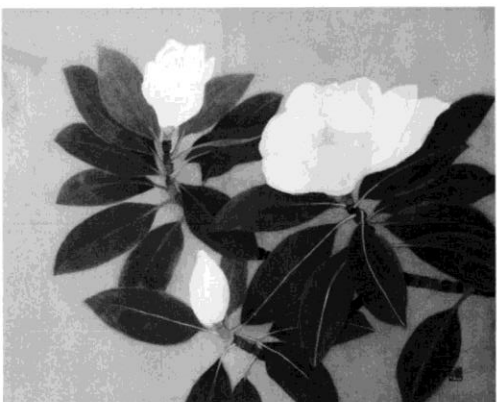
私の生まれた家は、江見から土居へ通じる県道沿いにあった。家からものの五十メートルくらいの所に水車小屋があった。集落の各戸が日にちを決めて交替で水車を使っていた。大概、一日二戸で使用していたが、中には一日二戸でというのもあった。使用中は日に何度か搗き具合を見に行つて、世話をしていた。

ところで、A家とB家は共同だったが、B家の小父さんが水車小屋へ行くと、決まってA家の若い嫁Y子さんが、いそいそと水車小屋へ駆けつける。祖母はそれを見て、「あれみい、またY子さんが行きよんさる」

と言つて、意味ありげににやりと笑う。A家とB家は共同だから鍵はひとつ、同時に行けば開け閉めに便利だと少年の私は思っていた。

「戸が開いていて一人居る」を見た時「戸が閉まっけて二人居たら」と思った途端、昔の祖母の声がよみがえつてきて、あやしげな笑みの意味に、はたと気がついた。

小屋の戸を閉めて、B家の主人とA家の嫁は、昼日中…水車はこつとんこつとんと、何も知らずに単調に回り続けている。



日本画 原田 縫子

所感寸云

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



生花 中田敏甫

私は世の人達の為一言書き残す

江見英雄

私はあと一年半で百歳を迎える老人ではある。日頃から歴史が好きで平成七年以来、同好の士と毎月一回古文書の勉強をしています。他に山口県で神社神道団体にも関係し、修業の結果、今では追々に階級下より拾段位に上らせました。また、神道とは別箇に霊界研究も致し、今では約四百名近い人の不浄化の人々を成佛させて霊界に送り込み、霊の安定を促して居ります。

この不浄化霊の発見は大変難しく、こちらが見当をつけ、供養をお勧めするとも佛の遺族等は「とんでもないことだ。うちでは日常茶飯の供養は続けている」と反撥せられる。甚だ

しいのは日露の役から遂に両三年前まで成佛することなく日は流れていたが、私の家近く再々話をする機

いつの時代でもどんなドラマでも悪役がいなければ始まらない。悪役の演技がうまい程、佳い作品にもなる。

毎年十二月になると決まったようにどこかで忠臣蔵が放映され、根強い人気がある。戦前は戦意高揚のために推奨され、戦後一時期、仇討に関する出版物禁止の時もあったが、大

悪役

衣笠隼巳

会あり、遂に得心してもらって、正しい霊界入りを果たした。この霊の他、約四百の不浄化霊を成佛させたり。

この人もしやと思はる方ならばチャンスはなかなかめぐり来ぬ。私の存命中に申し込みたまえ。

衆娯楽としてもはやされてきた。特に名優が演じる芝居や映画等は人気を呼んだ。テレビが白黒の時代、大河ドラマで長谷川一夫主演の「赤穂浪士」はいまだ脳裏から離れない。

赤穂城主、浅野長矩が遺恨のあまり吉良上野介に切りかかり、即日切腹、赤穂の浪士四十七名が吉良邸に討ち入り、主君の仇討をしたという

大筋はほぼ事実らしいが、そこに至るまでの経緯があまりにも戯曲で具が多過ぎるように見えるので、思いつくまを書き並べてみた。

まず、この件で悪役を一手に引き受けたのが吉良上野介という人物。一説によると、彼は三河国きつての人望厚い重鎮であったとか。彼は、江戸城で行われる年頭の祝儀答札の行事、勅使を迎えるための指南役、そして彼の指導を受ける立場の供応係、浅野長矩。長矩が上野介に献上した品が少ないのを根にもって、ことあるごとに、蔑なげにしたとされるが、そんなに了見の狭い人物だったのだろうか。

度重なる冷遇に耐えかね、刃傷に及んだとなっているが、もともと長矩は癡癖の強い性格で、現代でいう

すぐ切れるタイプだったとか。

ここでもう一人、悪役に仕立てられた人物がいる。「武士の情けをご存知あらば…」で名指しされた梶川与惣兵衛だ。そこに居合わせたばっかりに、一方的に老人に切りかかるのを見れば、それを止めに入るは当然の行為だろう。その結果、上野介にはお咎めなく、片や長矩は切腹となる。喧嘩両成敗の原則からあまりにも一方的な裁断であったとされる。ここで腑に落ちないのは、丸腰の老人に切りつけ、振り向いた相手の眉間に刀傷を負わず、これが喧嘩と言えるだろうか。

そしてクライマックス、討ち入りの場面、浅野家再興の望みを断たれた浪士達が多く苦難を乗り越え、本懐を遂げ、主君の墓前に御首みかしらを供

えたとなっている。その場面を想像してみると、完全武装の集団が徒党を組んで夜襲をかければ腕に自信のある面々を揃えていても太刀打ちできまい。結果は邸内の死者十七名に對し、討ち入り側は軽傷五名となっている。これは一方的な殺戮とも言えるが、いちいち挙げて臆測してもきりがなく、興味半減する。ここはやはり、仮名手本忠臣蔵の脚本を額面どおりに受けて鑑賞することにしよう。



老いのたわごと

吉 政 實 夫

土曜日の朝、五時半頃テレビで「昔の人に会いたい」という番組があり、故人の生前の姿が映し出されており、それを寝間で見ているうちに、日頃から両親はもとより早死にした弟や妹たちに会って、つもる話があったいと頭から消えることのない思いが一層募りました。

昨年から親鸞聖人七百五十回忌の法要が各地で行われており、高僧の御説教を聞くことができ、後で質問が許されたのでそのことを話すと、「それ人、それが仏教信者、浄土真宗の信心行者の目的であり、理想で、それを実現するには命ある内に、他力本願の道聞き、開き、臨終を迎え

ば必ず実現する」と教えられました。

蓮如上人は、「御浄土は、行きやすくして行く人なし」と、親鸞聖人は歎異抄の教えの中に、「人間界に真の善人は一人もない、皆それぞれ表と裏に顔があり、二重人格、三重人格の人ばかり。我こそ人間界最低の最悪の人間であることが自覚できたとき、阿弥陀様に二心なき助けを求めれば、必ず道が開ける」と説かれています。我は恵まれて、九十五歳までも長生きさせてもらいながら信心行者の道遠く、我が生涯を振り返れば、私欲と世間体の見栄に振り回されて、無明長夜の旅であったように思います。近いうちに行かねばならない来世こ

そ、明るい世界、無私無欲の無量寿国に生まれさせてもらいたく念じる日々です。願わくは、我が願い幸多かれと念ずるのみ。

毎度のことながら、老いのたわごとを並べました。お許しください。

親鸞上人が、弟子との別れる時の言葉

別れ路に さのみ嘆く法の友
また会う国があると思えば



洋画 森 環 世

芽生え

井口祥子

種子を蒔いて、何日かして、かわいい芽が出た時は、いつもうれいものである。しかし、今年、黒豆を蒔いた時、大変な失敗をしたのである。

それは、六月十一日に黒豆を田に直蒔きをしたところ、大抵一週間もすれば芽生えてくるものであるが、一向に芽らしきものが見えないので掘ってみると、くさってしまっていた。原因は、肥料のやり方にあった。一週間くらい前に肥料と土を交ぜておくといのに、蒔くのと同時に肥料を与えたのがいけなかったのである。悔いても仕方ない。そこで親しい友人に電話で尋ねると、種子が残っているのだからという。これくら

いうれしかったことはない。たくさん黒豆の種子をいただき、再度、黒豆を蒔いた。六月二十四日にどうか生えますようにと祈りながら蒔いた。

次の日より足は圃場へ向く。一週間ほどたった七月一日に、芽がむくりと頭をのぞかせた。「やったあ。」うれしくてならない。この気持ちは夫もいつしよで、二人で圃場へ見に行き、「あそこにも、ここにも芽が見えるね。」と指さしながら喜んだ。二人とも、ぼっと頭をもたげた芽がかわいくてならない。

少し草が生えると、夫は機械で耕し、梅雨の晴れ間を縫って土かきもした。機械で土寄せしたところを鉤

を使って一本一本の根元まで土を寄せた。念には念を入れてしたので、夫も私も、その日はくたびれて、へとへとになり、何をやる気も起きないくらい、ぐたっとなってしまった。

しかし、梅雨の雨は、日毎に黒豆をぐんぐん伸ばし、今、本葉が五、六枚くらいに生長した。

夫は、圃場によく足を運び、「少し虫が見られるようになったから、消毒してやらなくちゃ。」とか、「二回目の土寄せを七月中にしてやろう。」とか黒豆作りに一生懸命である。今年くらい黒豆の芽生えをうれしく感じたことはない。種子をくださった友人に感謝しつつ大事に生長を見守ってやりたい。

随筆随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



工芸 下山美好

金色の光

井上健一

二三年前のことだが、仁堀峠の近くの畑から室町時代の古銭が、備前焼の壺とともに発見されたという報道があった。

古銭はペラボウに価値の高いものではなかったようで、壺ごと寄付されたそうだ。

ここに何かが埋まっているらしいという噂はずいぶん前からあったそうだ。

一方、形の残らない宝物もある。今年、日本各地で観測された金環日食もその一つである。金環日食や皆既日食は、数年ごとに地球上のどこかの国で観測することはできるが、今回のように日本各地で大規模に見

ることができたのは、約九百三十年ぶりということだそうだ。

今回は数ヶ月も前からマスコミで騒がれていた。コンピュータの解析で、どの地域でどんな見え方ができるのかまで詳しく報じられた。

だがこれは晴天でなければ、全てが水の泡だ。数年前の皆既日食の時がそうだった。マスコミに乗せられて、多くの人が奄美方面に向かったが、ドシャ降りの雨にさえぎられ、多くの人が悔し涙を流した。

今回はどうかと思ったが、見事に、ごく一部がかけただけの金環日食を見ることができた。これもマスコミと科学の発展のおかげである。

だが、マスコミの影響は良いことばかりではない。東京電力の原子力発電所の事故報道もその一つである。

原発の危険性や不経済さばかりを先行して伝えるので、知識の乏しい私達には欠点ばかりが浮かんでくる。冷静に考えると、原発の運転開始から、半世紀経った今、過去に経験のない災害で、不幸にも事故が起こってしまったというわけである。

事故が起きたから全ての原発の即時運転停止を煽るのは行き過ぎではないかと思う。

原発は事故が起これば周辺地域への影響は多いが、太陽熱発電や地熱発電、波動発電等の研究を重ねてから、徐々になくしていくべきではないだろうか？

現に電力不足が深刻化しているが、

マスコミの煽りをわびたコメントはまだ見ていない。

マスコミの長所短所を知り、より快適な生活を営みたいものである。



この道はいつかきた道

長瀬 加代子

もう何年も前、勤めをしていた頃、

転動してきた上司から、「あなたは、庄屋の娘さんでしょう」といわれた。

庄屋は江戸時代の役職で現在は無い。しかし、庄屋だった家は今もあちこちにあり、私の住む集落にも庄屋が残っていて、何代目かの家族が住んでおられる。その庄屋さんの姓が私と同じのため、上司は間違えたらしい。

私は庄屋の娘ではないが、母方の

祖母は間違いなく庄屋の娘だった。

祖母の実家は、西粟倉村影石の中島家で、影石では相当の名家だったという。祖母は、大正十年に他界し、従って私は祖母の顔を知らない。

ただ一度、祖母の実家の中島家を、母を伴って訪ねたことがある。当時、母の従兄の当主が健在で、訪ねた日、表の座敷いっぱい古文書を広げて虫干しをしていた。奥の間には江戸時代の駕籠もあり、庄屋の歴史をか

いま見た思いがした。

車の中で、母がこんなことを話したのを覚えている。

「わたしは、こどもの頃、お母さんと影石まで歩いて行ったんよ。代えの草履を持ってな。帰りは馬車で送ってもらったから楽だったわ」

母は明治四十年生れだから、影石まで歩いたのは大正の初めだろう。その頃、中島家にはお抱えの車夫がいたそうだ。

上福原から影石までの距離で三十四キロあるがよく歩いたものだ。わら草履とにぎり飯の弁当を持って、祖母の里帰りに母は従っていたのだらう。母にもっと詳しい話を聞いておけばよかったと、悔やまれる。

昨年秋、西粟倉の若杉原生林を歩いた帰り、中島家に寄ってみた。国

民舎あわくら荘の手前、吉野川沿いに建つ旧家は、檜皮葺の屋根をのせた大きな門が閉ざされ、屋敷内はひっそりとしていた。

(後日、知ったのだが、堂屋敷と呼ばれる中島家は、時々、跡継ぎが大阪から帰省して、その時に屋敷内を公開

しているとのこと)

谷川橋を渡り、あわくらんど、道の駅の賑わいを眺めながら、遠い昔、美作の国から因幡へ通じる街道はどんな様子だったろうと考えた。大勢の旅人が行き交ったであろうこの街道を、祖母と母も歩いた。

世の浪人の為に

江見英雄

気をつけなくてはならぬのは歴史研究のことです。私の親族の居住する播姫路市の西郊松山部落は戸数約五十戸、姫路から鳥取市に通ずる国道二十九号線に副う標高一二〇米にある。此の松山の山城には、衣笠長門守が山城を築いていた。度々攻められて、最後は此の山城で戦死したん

だろう。縁故の人が此の山の南麓に衣笠長門守の墓標を建てたが、どうも石質がよくなく年月を経て傷んでいたことは過去二度訪れた私にはわかっていった。

三度目は本家筋に当たる元作東町長(五期)の江見晴則君や妹君と一緒にだった。其の人達と訪問し、下山して

私は、いつのまにか、歌の一節を口ずさんでいた。

—この道は、いつかきた道

ああ、そうだよ

お母さまと馬車でいったよ

南麓の墓碑を見ると新しく建替えてある。それは此の部落の人たちが建替えられたそうだが、何と云うことだ。長門守は長門守でも大阪城で活躍したる木村長門守になって居るではないか。何たることだ。之では兩人共浮かばれまい。私は少々縁故があるので敢えて此を取上げ、世の人に申し上ぐ。

そして…春が

岩本全子

いつもより寒い冬、長い冬がやっと通り過ぎ、何となく春を感じるよ季節になりました。私自身にとっても思いがけない足腰の痛さ、年のせいだと思ってもまだまだすること

が沢山残っているのに、こんな状態では…生きる希みもゆらゆらゆれて、心細い日々が続いていました。

寒いし、家の中で昔の懐しい若い頃の文集、写真を観ても動かなくなつた指でピアノを弾いても、「あの頃はよかったナー！」と一人で呟いてばかりでしたね。昭和三十九年頃、主人と二人で歌った「真夜中のギター」等すぐ涙が出てしまいます。「今、足が痛い位で弱音を吐いては」と遠い

国から叱っています。「ありがとう！又頑張ってみるね！」とは云つても季節が仲々暖かくなれないのと同じ位、精神的に上向きにならない日が続きました。毎年二月になると裏庭の白梅が綻び、少し遅れてウグイスが慣れない調子で春の訪れを伝えてくれますが、今年は三月になって、春の訪れを知りました。

その後は順調に暖かくなり、白梅がまず満開になり、紅梅、うす紅梅と美しくその姿を観せてくれました。この光景を観て私もやっとな春のバトンを受け取り、走り始めました。四月になり、私のあれほど痛かつた足が軽くよくなりました。「今年も

稲作りが出来るぞー」本当にうれしくて、うれしくて！遠い空から主人が笑っているように感じました。春が来ました。春が来ました。そして五月末に植えた苗も今では立派に成育して、もうすぐ穂が出るまでになりました。

私の人生において、今年の夏は又格別です。身体を大切にして、心から毎日をエンジョイしたいものです。

ありがとう！



作東文化協会の研修旅行に参加して

内藤善晴

七月一日、作東文化協会の研修旅行に参加させてもらった。

運転手さんは去年と同じ神原さん、ガイドさんは畑中さん、参加者は会長以下三七人と幼児二人とお聞きした。

バスは快調に走り、南あわじ市の「うずしお」という道の駅で、随分早い昼食をいただいた。そこは大鳴門橋の付け根にあって、なかなか眺望のすばらしい所だった。

大塚国際美術館は、その大鳴門橋を渡るとすぐの鳴門公園内にあった。景観を損なわないように配慮して、地下五階、地上三階の鉄筋コンクリート造(一部鉄骨造)の建造物が山の

上に少々と山の下ないしは中にその大部分が組み込まれているのだという。

一九九八年(平成一〇年)三月二一日開館とのことなので、すでに一四年を経過していることになる。何の予備知識もないままに訪れて、ボランティアガイドさんに連れ回ってもしっかり、その説明を聞きながら、結構忙しく回ったのだが、不消化の感はない。

この大塚国際美術館は、大塚グループ七周年記念事業として設立されたもので、日本最大級の常設展示スペースを有する「陶板名画美術館」だという。古代壁画から世界二五ヶ

国一九〇余の美術館が所蔵する現代絵画まで、至福の西洋名画一〇〇〇余点を、オリジナル作品と同じ大きさに複製しているのだという。しかも陶板名画は、約二〇〇〇年以上にわたって、そのままの色と姿で残ると言われているので、これからの文化財の記録保存のあり方にも大いに貢献するものだと言われている。

私たちは、地下のモネの「大睡蓮」の所でガイドさんに別れを告げることになったが、そこからは集団を離れて、急ぎ足で地下から一階・二階と見て回った。ここでは美術の教科書等でおなじみの世界の名画に出会うことができた。

ともあれ、歩いて回るだけでも疲れるような広さの中で、いわゆる名画に対面させられたわけで、すつか

り火^ほ気に酔ったような感じで一行に合流し、帰途についた。こういう時は人は寡黙になるものらしい。

天気予報によると、終日雨のはずだったのに、なぜか持つて行った傘は一度も使わずじまだった。

色々の行事を計画して下さるのです。今回は、今年の第一回目。いつもの顔ぶれに会えて何か安心して、うれしくなります。

一人暮らし高齢者への支援に感謝

小林醇子

早いもので今年ももう半年過ぎてしまいました。

六月の初旬、七十才以上の一人暮らしの高齢者と作東福祉ボランティアの会吉野支部の人達との「ふれあい見学旅行」で岡山市撫川のRSKバラ園へ連れて行ってもらいました。

通知を頂いてから、楽しみにしていました。久しぶりのバラ園は予想通り本当にきれいで見たことのない色のバラ・バラード、いい香りが漂い、天候にも恵まれてお昼は「山

幸」でおいしい食事をいただき、帰りにはなつかしい「四季の歌」とか「リビングの歌」等、皆さんと合唱して、とても楽しい一日を過ごしました。

今迄でも「高齢者の集い」として、近くの公民館で「健康長寿の秘訣」についての保健師さんの講演を聞き、ボランティアの人達の手作りおやつのおむしパンを頂いたり、湯郷のバイキングに連れて行ってもらったり、クリスマスには、ショートケーキとちらし寿し等下さって、年に四回、

私は今のところ毎回楽しく参加させて頂いて身心のリフレッシュをさせてもらい、とても感謝しています。そしていつも参加させて頂ける健康にも感謝しています。

役員の皆様には色々大変でしょうが、今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



断捨離

原 洋 一

最近、よく目にし、耳にする言葉に「断捨離」がある。物を断ち、ガラクを捨てれば執着も離れていく。その漢字三字を取って断捨離。身の回りには物があふれ、あれも欲しい、これも欲しいと「足し算の生活」にどっぷりと浸かり過ぎていないか。古希を迎えた今年、反省も込め、老前整理を考えてしまう。

戦中派としては、物を大切にしろと教育され、捨てる物も捨てられないのが本音である。

これまでを振り返ってみると、自分の場合、二つの大きな断捨離チャンスがあった。一つは故郷を捨て、子供としての甘えを断ち、親元を離れ、

就職した時。二つ目は仕事を捨て、都会生活に見切りをつけ、田舎暮らしを始めた時である。それぞれに、それまでの物も、人付き合いも捨て、生活のスタイルを変えてきた。チャンスというよりも必要性に迫られてやったことではあるが、それぞれの機会が今思えばまさに断捨離だったような気がする。その度に身軽になり、生活が小振りになった。

そして今、岡山に移住して十四年が経った。これからの人生の景は想像に難くないが、ふと身の回りを見れば、田舎暮らしにしては物が溢れてきている。このまま足し算の生活でいいのだろうか。

友を作り、結婚し、子もでき、孫もできた。繋がった人の輪は決して小さくはない。どこまで絞り込めるのか、必要最小限の大切なものだけで老後は過ごせるはずだと頭では分かっている。「終わり良ければすべてよし」。人生の終焉をどう生きるのか。あまり難しくは考えていない。どう快適に生きるかだと思っている。そのためには断捨離は欠かせない。不要・不適・不快を排除し、片づけを通して自分を見つめ直し、心の混沌を整理して、生活も心も身軽になることであろう。「シンブル・イズ・ベスト」。人生の最後を快適に生きるために、これからは「引き算の生活」に転換していきたいと思っている。

ただし、今回は自分の意志で実行する断捨離である。一筋縄ではいき

そうにないと承知している。現に今でも、隣の部屋では妻が叫んでいる。「お父さん！この本、捨ててもいいんでしょー捨てるわよー！」「えー。ちょっと待てよー！」



大切な手紙

加藤 美雪

「光陰矢の如し」という諺がありますが、美作市川北の生家に帰りましてより六十六年になりました。父が大阪府立茨木高等女学校へ昭和元年に転動いたしました。二十年間、都会生活を致しました。

現在、私の本棚に「残して置きたい手紙」と書いたスクラップブックがあります。今読んでみれば昭和四十二年付のスタンプが押してあり、女

学校時代の同窓会の友より遠路の所を花をそえて下さいましてこそ意義があるのだらうと思われれます。私も農業の主婦です。農家と云っても現在は仲々生活程度が高く、悠々自適の生活が出来ますから良いと思えます。いつまでも付き合িয়েして下さい。お互いに慰め合って生きましよう。と書いて居られました。

もう一人の方は寝屋川市にお住ま

いの友で兼業農家へ嫁ぎ、生活改善グループの手によって「庶民の歴史」という本を出版され、農家の主婦が戦時中を過ごして来たものが書き集めた本を送ってこられた。私も一町程の田圃を田植機が出来ましたので、母を頼りに稲苗を作り、頑張っていました。

三人目の方は実家が農家でしたが、御縁がお有りになり、箕面市粟生西国第二十三番札所の応頂山勝尾寺へ嫁がれ得度され、「小島和光」と改名され、川北の佛法寺とは深い御縁のお寺です。佛法寺婦人会の方々とお参りさせて頂きました。その時の嬉しさは格別でございました。故主人の回向供養されますことが第一番だと思しますので、当山へも父上と一緒ににお参り下さいとの真心のこもり

ました立派なお手紙でございました。
最後のもう一人、宝塚歌劇のベル
バラで有名な池田理代子さんのお母
様も岡山の同窓会にわざわざ出席下
さいましてお目もじをして居りまし
たが、千葉県にお住まいで年賀状だ
けの付き合いで御亡くなられ、次ぎ
次ぎ悲しいお知らせばかりです。私
は若い時代には農業に一生懸命して
いた為で四十回「なでしこ会」をして
下さいまして十一回岡山にお住まい
の方と出席出来ましたが何よりよ
い思い出でございます。

本当に淋しくなつて参りますが、
家族には息子夫婦、孫夫婦が居り、曾
孫も二人、でも昔のような生活は全
く変わり、何処にも自家用車がある
ので便利はよいが、自分が運転出来
ないのが残念です。然し通所リハビ

リテーションが出来て、送迎してく
れるのでこれが一番良いことと思わ
れ、その上、介護福祉の方々も優しく
よくして下さるので本当に良いこと
と思います。

昔の諺通り、「老いては子に従え」
とはその通りです。



写真 井口満春

歴史紀行

大きなできごと

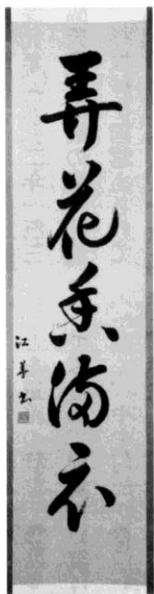
些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなつて

伝えよう



書道 水嶋江華

むかしからの往来を辿る —杉坂峠と萬能吼の坂越え— 春名正昭

むかしの播磨の国府(姫路市本町)から美作の国府(津山市総社)へ通じる山陽道の美作支路は、約一三〇〇年前、杉坂峠を通るコースであった。杉坂峠越えは上福原から田原と佐用町皆田の境界、標高二五〇米を経て佐用に通じる約十四軒の行程で、現在の中国自動車道とほぼ平行している。

時代の移り変わりとともに、どのように変化発展していったのだろうか。

一方、萬能吼越えは上福原から山家川沿いに土居と佐用町西大畠稗田の境界、標高二二二米を経て佐用に通じ、その距離は約十八軒ある。

津山藩の姫君が播州への旅の途中、病で倒れて卒去された。その地に近い蓮花寺の大瀧神社近く(南の地)に、姫君のご遺体を葬り、「お姫塚」として祀ってある。

この不幸なできごとがあつて以後、往來の道替えをしたとの説もあるが、定かではない。

古代からの道が時代の変遷によって、その時々々の要請によって拓け、発達していったのだらうと思いを巡らせてみた。

来年は、美作国建国一三〇〇年、関連する地域等でイベントなど行事への取り組みが始まっている。

この機会に、歴史について先人の歩みに思いを馳せ、恐らく辛苦の中でも国造りに向かつて絶え間ざる努力を続け、現在につなげて下さった

南北朝時代(建武二年一三三五、元

中九年一三九二)、太平記(四卷)に

よると、正慶元年(元弘二年一三三

二)に後醍醐天皇が隠岐の島へ配流

される途中、杉坂峠を国越えされて

院庄へ向われた。同記(十六、二十九卷)

にも延元元年(建武三年一三三六)に

足利方の勢力を掃討するために、新

田義貞の武将(江田行義)が杉坂峠へ

向つたとの記録があり、前記時代の

頃の往來は杉坂峠越えが主要なルー

トだったことがうかがえる。

次に、萬能吼越えは徳川幕府の成

立後、江戸時代に入った慶長八年(一

六〇三)以降、往來の街道としての整

備が進み、特に津山藩や松江藩らの

であろうと思う。

記念行事の大小にかかわらず、単なる一過性の催しに終わることのないように、何かを残し、伝えていくような方策を望みたい。

不思議なる縁

江見英雄



平家なる侍大将と云はれたる江見治郎守方公の塚近く其の子孫たる江見幽子と云はる、は今次、戦争終戦一週間前に南方海域の戦で戦死せられたる海軍軍人なり。

幸い一女ありて辛うじて衣鉢を続

大名の参勤交替の政治の道として盛んになった。勿論、旅人の道、鉄(産業)の道、生活の道、更には文化交流の道として頻繁さを増していった。

ここで、杉坂峠越えと萬能吼越えとを道路の状態、道路条件を考察してみると、前者は距離は短いが高く、やや勾配がきつい(険しい状態)が人の通行は可能である。後者は距離は長い、標高は低く馬の道として物流への対応もできる。(文中湊哲夫氏「研究ノート」引用)

時代の大きな流れの中で、交通量も増し、対峙できる条件の道が、このコースへと変化することとなったのだろうと想像できる。

ある時期、萬能吼の北方の出合から稗田への道があり、室生坂越えもあつたと伝えられている。

ぐも、戦後の混乱期、この戦死の人の妻たる人は嫁入先より他家の人となる。食糧其他余程苦勞のありつらん。残されたる戦死軍人の娘も年長けて他家の人となる。然れども漸く程よき人と所帯を持ち乍ら、己が祖父

母等の事忘れられず、理解ある家庭の人として此度嫁女の亡き父及び祖母父母等の墓石建立に協力し給へり。

考うれば私も前後二度の召集を受けたる陸軍曹長、他人事ならずと墓

石の発注建設に心からなる協力をさせて戴いた。

嗚呼、有難き事かな。私も時々墓地に詣り、供養させて戴いて居る。

美作市「杉原弥生墳丘墓」は美作古代史を明かす大発見

加藤芳英・春名倫子・安東奈穂子

はじめに

この墳丘墓は「美作市クリーンセンター」(市民のゴミの焼却炉や埋立処分場)計画予定地の杉原、矢田、河内、真加部、豊久田等にかけての丘陵の頂上部にある。

美作市教育委員会は、平成二三年一月～三月にかけて発掘し、資料作成や現地説明会を実施した。

この「弥生墳丘墓」の三大特長

現地説明会後の平成二三年一〇月に、市教委社会教育課主任 池田和雅氏は、左記三大特長があると語った。

- ①三世紀初の築造
- ②方墳(一七メートル×一五メートル)
- ③但馬系の墳墓

墳丘中央部は盗掘されており、土器破片の出土状況等は「報告書」に記載

載(ここでは省略)。

今後の保存・展示等は市教委中心に

平成二四年六月の、クリーンセンター建設担当部局の石田環境部長は、「地元杉原の地区対策会」での席上、当面の現地保存計画を左のように述べられた。

「墳丘墓は公園みたいな形で現地保存する。周囲に桜などを植栽したり、ベンチを置く。」

「センター建物の一室を施設や墳丘墓の見学者が利用できる工夫をした。」

「総合的な保存展示などは、市教委の担当となる。」と。

私どもは、地元対策としての「勝田地区文化交流センター」(仮称)が設置されるような場合には、写真やパ

ネルなどのコーナーを求めたい。将来的には、生徒・学生や婦人・老人会向きの展覧施設が開設されることを望む。作州東部の古墳、条里跡、社寺、荘園、郡・郷里地名、古道、古文書、地図、山城等々が鳥瞰的にわかるパネル等を市教委は、今から準備して欲しい。

スサノオ・ヒミコ時代に築造

倉敷の「榑築弥生墳丘墓」に匹敵

「日本」の一世紀頃は、百余の原始国家に分かれていた。二世紀後半には「倭国大乱」があった。三世紀になって「日本」は、統一国家への道を歩み出したと学者等は発表している。

二世紀の頃は、スサノオ、大物主(ニギハヤヒ)、大国主、ヒミコの時代だと述べる研究者がいる。

二世紀の『倭国大乱』後の二二九年にヒミコ(卑弥呼)が中国の魏に遣使して、「親魏倭王」の称号と金印を拝受した記録が残る。

出雲をはじめとする日本海沿岸は、古代「日本」の表玄関で徐福などの渡来人が多数上陸した。朝鮮、満州、中国との貿易や交流も盛んであった。

瀬戸内海は、九州と大和間の交流の大動脈。(六七三年即位の天武天皇の頃に「天皇」、「日本国」の称呼が確立した。)

二～三世紀に日本海側との交流

因伯、播但、備前に囲まれた美作勝英

「杉原弥生墳丘墓」が「方形」で但馬系であることは、スサノオ、大物主、大国主などの勢力や、豊岡出石のヒポコ(製鉄技術など)との交流の存在

が想像でき、「タタラ」や「鏡作り」伝播ルート説明のカギとなる。

吉備・美作の古代史を研究・解明するデータとして、関連する古墳を年代順に挙げるので、よろしく。

共に考えよう！関連の古墳一覧

・三世紀初

「杉原弥生墳丘墓」

(一七メートル×一五メートル、方墳、但馬系様式)

・三世紀代

「榑築弥生墳丘墓」

(八〇メートルの円墳(突出部つき)倉敷市矢部)

・三世紀中葉

「著墓古墳」

(三八〇メートル前方後円墳、日本書紀は大物主(物部の先祖で神武妃の

父)の妻ヤマトトモソヒメの墓と
とれる表現をしている。奈良県桜
井市)

・三〜四世紀前半

〔宮山古墳群〕

(総社市三輪、三輪神社の祭神は猿
田彦、配祀 大物主、「先代旧事本
紀」研究の要あり)

・三世紀後半〜四世紀

〔浦間茶臼山古墳〕

(箸墓古墳の「二分の一」サイズの
前方後円墳、岡山市浦間)

・古墳時代

〔赤坂今井墳墓〕

(丹波王の墓か、方墳、京丹後市)

・三世紀末〜四世紀

〔河合古墳〕

(四六_{メートル} 前方後円墳 美作市勝
田久賀地区)

・古墳時代

〔真加部観音堂古墳〕

(四四_{メートル} 前方後円墳 勝田地区

真加部)

・六〜七世紀

〔川戸古墳群〕

(方墳一四・五_{メートル}×一七_{メートル}、六世紀。
円墳八〇_{メートル}、七世紀 大原地区川
戸)

・三世紀後半〜四世紀後半

〔中山茶臼山古墳〕

(前方後円墳一二〇_{メートル}、大吉備津彦
の墓と伝う。岡山市吉備津)

(注記)

吉備津彦は三世紀中葉に温羅と
戦ったという。鬼ノ城は約四百
年後の天智天皇の白村江敗戦後
に築城という説あり。四百年の
空白期間をどう説明するのか。

・四世紀初〜四世紀中

〔榎原寺山古墳〕

(前方後円墳、五二_{メートル}、美作市榎原
下)

・四世紀〜五世紀初

〔月の輪古墳〕

(円墳六〇_{メートル}、美咲町飯岡、和気氏
先祖の墓とみる説がある)

・四七五年頃

〔植月寺山古墳〕

(美作最大の円墳九一・五_{メートル} 未
発掘 勝央町植月)

・五世紀頃

〔美和山一合墳〕

(前方後方墳八〇_{メートル}、植月寺山古墳
発見以前には美作最大の古墳と
称えられた。)

・五世紀前半

〔造山古墳〕

(前方後円墳三五〇_{メートル} 岡山市新
庄下)

・五世紀中葉

〔作山古墳〕

(前方後円墳二八〇_{メートル} 総社市三
須)

・五世紀後葉

〔両宮山古墳〕

(前方後円墳二〇六_{メートル} 赤磐市穂
崎)

・六世紀代

〔佐良山古墳群〕

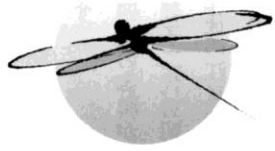
(欽明天皇の頃、横穴式石室多数、
津山市)

右は、一部参考例として列記。

(美作市内に存在する古墳はコシ
ック活字にして見易くした。)

江見神社の由来

宿野喜一(遺稿)



「日本は神の国である。」と某有名

人が公言した一言が記憶に残ってい
るが、神社で宮司の唱える「大祓詞」
(おおはらへのことば)の中にも最初
に「八百萬神等を集へに集へ賜ひ」の
詞があるが、初代、神武天皇は西暦前
六百十年ですから、それ以前から
神様として祀られていたのであるか
ら神社の歴史由来は、信じ難い程古

へものである事が伺われます。

神社数は日本全国で大小神社併せ
て、九万三千社の多きに達し、稲荷神
社が一番多くて、一万九千八百社の
多きに及び、二番目が応神天皇と神
功皇后を祀る八幡神社が、一万四千
八百社である。三番目が菅原道真を
祀る天神神社であって、一万三百社
である。その他数多く神様を祀る神

社の数は膨大なものである事は前述の数字が示すとおりである。

仏教伝来は、五五二年と云われていますが、最も仏教が盛んになったのは、奈良時代であり、神仏共用で信仰してきたのであるが、明治維新になり、神仏別居が再度唱えられ、この地方でも数多くの小神社には仏像・仏具等が供えられていたのを整理して、江見神社に合祀したのである。

明治三十九年に政府から「合祀すれば政府から、神饌幣帛料供進制度」によって恩恵があり、江見字八幡山に江見神社として発足したのは、明治四十四年十二月二日である。その当時の部落の神社名は、川崎の恵比須神社。原の原神社。藤生の八幡神社。川北の八幡神社。今在家の豊稲須佐神社。上福原の福原神社。山城の国司

神社。田原の田原神社。日指の日指神社。南海と峠の荒神社を合祀して江見神社として村社に列したのである。

神社の象徴である、参道正面にある大鳥居は(因幡街道沿いにある)今在家豊稲須佐神社に奉獻されていた鳥居であり、その刻字には「弘化四丁未年十一月吉日建造(一八四七年)

末宗六郎兵衛 亥年四十五歳」とありますが、財力もさる事ながら、この人の豪快さと仁徳の偉大さを痛感し、敬服するに余りあり。

神社正面の石段上がり口の鳥居の刻字は、

「寄進 川北西分、氏子中

明治四十四年十二月二日建之」

合祀に際しての氏子連中の誠意ある寄進が感じられる。

神社北口の参道石段の上部左右の石柱には、「原氏子、明治四十四年十二月二日」裏参道に相応しい石門であると、参拝者は感じて余りあるものである。

右の原、川北、今在家の三神社はいずれも、山口神社の分神であり、山口、原、川北、今在家の四邑の秋祭りは毎年十月十九日であり、邑人達の最も楽しい一日であったこと。

山口神社を親神様とする、三邑の神社の御輿を青壮年の木綿袴を端織り、櫻掛けの鉢巻姿で御輿を担いで川を渡る姿は、勇壮そのもので有ったこと事です。

山口神社に四基の御輿が勢揃いして神原宮司(親子二代宮司で榎原村平福の人、合祀後の江見神社の宮司)の御祓いと大祓詞を賜りて村々に帰

参したとの古老の言である。

神社は、尊厳さを保つのが、第一条件であるが、ある時期には新興宗教に圧倒された時もあったが、尊厳さが失われた感がある。

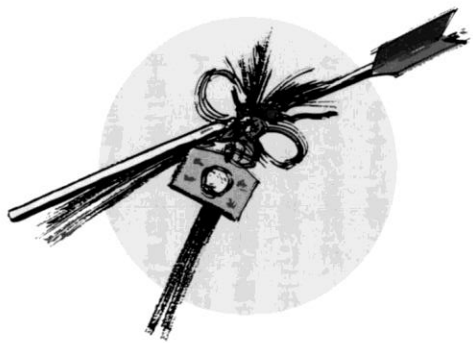
戦中、戦後と神社の社屋、石段は荒れ果て、神社の尊厳さは失われた感があったが、昭和六十一年、大改造改修が実施され、本殿、社務所も去る事ながら、石段が立派に生まれ変わり、参拝者の喜び又一入なり。

秋祭りになると江見神社に合祀した各神社の御輿が江見小学校校庭に勢揃いしたのが確か五基位あり、着物姿で後ろを端織り、白足袋に草履の御輿の担ぎ手容人の中に、父の姿の有ったのを、この老人が小学生時代の判然とした記憶にある。

その当時、御輿は五基以上有った

のではないかと、微かな感が脳裏を泳ぐ。

合祀後の江見神社は榎原村の神原義夫宮司により司祭が営なわれていたが、現在は沖田宮司である。



江戸地区の文化財めぐり

光井和彦

平成二十四年五月二十六日に津山郷土博物館主催の江戸地区の文化財めぐりに参加した。

午前九時半に家を出て、十時頃、塩手池の駐車場に着いた。ずっと前に来たことがあるが、池のほとりがきれいに整備されているのに驚いた。芝生・休憩所・駐車場・遊歩道などが作られていた。貯水量県下一のため池であるとともに、人々の憩いの場にもなっているようである。

十時半になって文化財めぐりが始まった。

○塩手池の礫岩

塩手池の公園の一隅に礫岩が整備してあり、海生の貝の化石が多く含

まれていた。これは今から二千万年前に津山盆地が海であったためである。美作市小野の弘法山にも貝の化石が出るので、一続きの海だったと思われる。

○本丸城・河原山城

江戸小学校や県道四五〇号線の西側の小高い丘陵上に本丸城跡があり、その北側に河原山城跡があるが、未整備のため中に入るのは難しいので外から見学した。あまりにも集落に近接して築かれている城だなど思った。

○西村の榎

樹高一三メートル、目通り周囲二・七メートル、樹齢が約二〇〇年

の榎で、江戸風を強く受ける方角の枝は風にすくんだ姿であり、江戸風の生き証人のような木であったが、平成二年秋の江戸風で根元から倒れてしまった。地元の人はいを悲しみ、「榎跡」の石碑を建立した。

現在、その場所に二代目の榎が育っているのを見たが、やはりすくんでいるように感じた。粟井地区も江戸風に襲われるので、この辺はとて

○五穀寺

山号は「作本山」といい、日本原高原を見渡せる高台にあり、江戸神社と隣り合わせになっている。山門を入ったすぐ左手に樹齢推定三〇〇年の古い紅梅があり、市の天然記念物に指定されている。

○江戸神社

天文二年（一五三三年）尼子氏の武将三好安芸守が国人の江戸弾正が立て籠もる矢櫃城を攻めた際、戦火により神社は焼失したが戦勝の後社殿を新築し、社頭に杉と藤を植えたこと伝えられ、現在も境内に「尼子杉」といわれる杉の大き木が立っている。さ

わると歴史を物語っているようである。
○日本原神社と芭蕉句碑を見て、午後二時半、塩手池駐車場へ帰った。



勝 垣 板 芸 園



園芸 末宗重信

俳句

若葉雨

山本登山

武士の史跡にそぐ若葉雨
 風鈴の音にうなづく客も居て
 鯛の声止まずして釣を置き
 京の味移してすする蕪の汁
 落椿流れに沿って浮き沈み

風の幣

沖田はるみ

玉砂利の音も清々し初朝日
 草の芽の喜び伸びる小糖雨
 老祢宜の手の休みなき白扇
 大海へしづかに大河大銀河
 雪の野の地神鎮めの風の幣

短文芸

生きている
 あかしとしての
 自分の思いを
 自分の言葉で
 表現する
 その表現が
 万人の魂を
 ゆり動かす
 短文芸の力
 伝統文化の力



写真 水島正崇

良夜

高橋 やえ子

摘草や昔は跳べたこの小川
鯉の口ばかりと春日味わいぬ
川蟬の青きかげ置き翔ちにけり
鞠を刺す色糸散す良夜かな
空耳と思ふ訃報や冬怒濤

春の雪

山本 靖子

元日を祝う家族の笑顔かな
髪の毛を濡して消ゆる春の雪
惜春の琴の音流る古き町
病い越へ若葉を見つつ新天地
草刈機リズムに乗って右左

柿若葉

井口 祥子

梅つぼみ母の苦楽を偲びをり
こぼれ落つ椿いとしく拾いをり
忘れずに我家に帰る燕二羽
柿若葉薄暮にとける鐘の音
梅雨晴れ間両手いっぱい濯ぎ物

折にふれ

杉本 幸子(土居)

由布院に湯けむりのほる浅き春
此の道は父母の墓あり曼珠沙華
またひとり続く訃報や春寒し
春愁や遠きあの日の歌流る
変らずの笑顔の人や若葉風

農婦の四季

真野 雅子

軒下で舂踊らせて手蒔かな
孫達と植えたジャガイモ花ざかり
早稲香る刈取る我子の玉の汗
柿を挽ぎ亡夫に供へて一つ剥く
日向ほこ布編草履初挑戦

亥ノ子唄

春名 静山

山里に響きて子等の亥ノ子唄
飾^な絢ふ力の失せし齡かな
笹百合のバケツ一杯ありし頃
もう染める歳でもない木の葉髪
元日の日の丸昭和遠くなる

蛸の宿

樽井 清江

思うこと明日にのばし冬籠
浅漬や大地の恵みそのまんま
黄蝶にほほえみかえす秋の空
ふく風に問えば夕餉の秋刀魚かな
今日を生き日暮れて静か蛸^{せみ}の宿

花菜風

下山 紀子

鎌使ふ音緩やかに花菜風
ただ歩くだけの幸せ花菜風
この土手をあの頃あの日菜の花忌
たつぷりと花菜の彩に染まりけり
エプロンに摘みし花菜の匂ひけり

江見駅

加藤美雪

初電話テレビで視たか江見駅を
雪舞て豪雪の地を思いやる
若き日の日記読みふけ冬籠
若葉山眺めて阿波の湯に浸る
大木たぎに絡み着きしや藤の花

古城

坂部金治

山若葉視線の果ての古城かな
病室の天井睨む残暑かな
裾野原可憐に咲きし野菊かな
切込みを入れて吊るせし干し大根
水よどむ川面を染めし花椿

旅

春名はるを

古文書やじっと我慢の春炬燵
予讀線蜜柑日和の松山へ
足摺の椿の宿の酔ひ心地
惜春の寮歌声張りうたふかな
夢千代の夢を探しに冬の宿

若葉道

青山元江

押し車止めて息吸う若葉道
ひぐらしに老いの歩みを急かされて
此の道は実家の近道芒原
農好きなき嫁の大根無農薬
定年のなき句の道や春寒し

谷若葉

香山秀子

いのちある限り燃えたし谷若葉
峡の日のふりそそぎをり曼珠沙華
後手に話もはずむ落葉焚き
龍りゅうの如天までとどけトンドの炎ひ
田植すみほつと一息句の集い

四季の詞

青山美和子

土筆坊畦道小道ドレミファソ
里若葉優しく揺れる昼下り
脱ぎ捨てて又脱ぎ捨てて立夏なり
岩肌にかほそき野菊しがみつき
寒の入り独居の人が気にかかり

若葉萌え

豊田絢子

雲間よりさし込む光ひかりに若葉萌え
溝萩を供へて遠き父母偲ぶ
群れて咲く野菊をさけて草刈りぬ
短日や日向追いかけて布団干し
春の暮遠き雲間の命かな

暑さ

樽井悦子

ひんやりと首にまきたる豆しほり
園児達願ねがい書いたと自慢顔
露天風呂飛びくる木の葉手の平ひらに
静けさをやぶりて鳴きし蟬の声
梅雨あけて蛙鳴きやむ暑さかな

裏山の古木の大本

森本久子

裏山の誇の大木王となり
遠雷の他空に去りしいなびさす
曼珠沙華古木に咲きて誇らしく
猪のいつもの音に跳ね返る
谷水の小石ころころ音静か

二度童

春名静山

絞られた揚げ句ピンタの飛んだ頃
日向ほこ欲を離れた二度童
免許証を返せば困る山暮し
一日の乾きを癒すコップ酒
大砂漠月とラクダがよく似合う

川柳

山家川美しく

江見英雄

見る度に河変り行く山家川
草とりに追はれて老の火は尽きぬ
ロンドンに日の丸上ぐる人はだれ
安らげき送れる日々のありがたさ
名の如く美作市をば作らばや

欲

山本登

母の乳より先に手が出る風呂の袖
角帽の重さは父母の肩に聞け
義理で押す印鑑すこし斜めなり
良くしゃべる妻の財布は口堅い
九十二才過ぎても生きる欲があり

足

山本昌子

足腰の達者が欲を離さない
決断の一步はいつも右の足
炎天も好きな句会へ弾む足
寝つかせた孫を起こさぬしのび足
苦勞など知らぬ昼寝の足の裏

日々是好日

衣笠隼巳

老人をお供に散歩お犬様
病院の名が幅をとるスケジュール
踏まれても枯れずに耐えて来た昭和
鴛鴦の夫婦演じて五十年
ボケ防止夫婦喧嘩も役にたち

秋

遠藤栄

萩ゆれて風も友達散歩道
読書よりテレビが先と一人部屋
赤とんぼ共に飛びたいこの村で
想い出の詰った棚田母の肩
口笛も吹きたくなるよ秋の風

生きる

太田智子

秋日和母の形見と長話
亡夫の匂残る農具が喋り出す
人生の流れの底にある起伏
老いの坂又心配の種こぼれ
日焼け止塗っても焼ける野良に生き

古稀

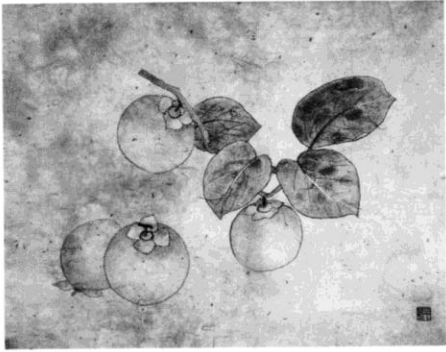
原洋一

今日からは風を師とするわれは古稀
好奇心も腹も八分で古稀の坂
万智風に入れ歯記念日古稀の鬱うつ
いつそ真つ赤に塗ってみようか古稀の画布
百歳を目指す笑顔の古稀でいる



洋画 安東公一

短歌



日本画 円東千歳

雁字搦め

坂井はつ子

「はい並んで並んで」と呼ばれ並びたり行きつく
先は卵の安売り
やあやあと出合ひ頭に話すうち喉飴ひとつ分けて
くれたり

ひつかかる言葉があればむくむくと日每育ちて雁
字搦めよ

一つとなりて

梅本信恵

冬の縁に甘き匂ひを漂はせ切干大根白く乾くも
葱坊主みなそれぞれに背のびして五月の空を押し
上げてをり
踏む我と踏まるる枯葉が山道に一つとなりて音立
ててゐる

菜の花広がる

安東 奈穂子

何うしても巧くはゆかず書きさしの作品の前に続く溜息
春愁のけだるさ老い身に感じつつ退職前の子を想ひつつ
若草の萌える山岸ふらふらと下れば「余野」に菜の花広がる

四ツ塚一五〇年祭近し

江見英雄

次次に法事の報せ来つれども思いに任せず足の痛みて
幾度もまろびつ起きつ手に入れし榊葉立てておろがみまつる
生れし地と縁のありて住める地の産土神の恩徳忘れな

祖と共に

山下光子

外出より戻りし吾は出来事を祖に皆告げようやく寛ぐ
日がな一日誰とも話さぬ日もあれど祖とは朝な夕なに語る
憂き事も嬉しき事も祖に告げ吾は過ごすか生あればこそ

旧友

春名静山

戦後より六十七年を経て友の消息を知る無事ではなかった
出征兵士数多送りし校庭に戦を知らぬ児童等遊ぶ
朝咲きし木蓮の花に紅差して昼を華やくひと日の命

ながらへて

新免初子

ながらへて小さな幸せ守りゆく冬の晴れ間を浮雲二つ
捲き戻し利かぬ命の今があり川の流れのやうに生きたし
すでにして老いはこの身ににじみしか泥付く鋤の鏽の浮くごと

声

松本哲夫

島根より受話器に聞こゆる戦友の声互ひの健康語らひあひつつ
山あひに望める中国連峰は雪を冠りて煙れる裾野よ
山道行く落葉の音のかさかさとして我が足音に振り返りては行く

里の夕

豊田絢子

木の枝に蔓巻き付けて紫に実る通草よ夕空に映ゆ夕映えに稲穂黄色き田の上を群れて飛びかふ赤蜻蛉かな
鋤置きて遠き山々眺むれば秋の夕焼けはやさめにけり

我一人なり

小林潤朗

去年まで夫婦で為しし墓掃除今年は空しき我一人なり
初盆に親しき友が集ひ呉れ思ひ出話に涙する我
仏前に供へし好物時経れど少しも減らぬは寂しかりけり

寒あやめ

加藤 幸子

霜を置く草に紛れて丈低きあやめが咲けり紫薄く
チューリップ パンジーの蕾が色づけば黙ってあ
ても夫が水やる
コンピニの明り庭まで及びるて闇の雨足そのみ
光る

実直に正見

加藤 芳英

吉野川と山家川が今開く河幅倍化の護岸造成
こつこつと希望の道を行くさまは尊かりけり
「身」を大切に
真白なる「ひとつばたご」の花清し五月の空へ白
光発す

八十路になれば

杉本 幸子(土居)

久々に会ひたる友と話しをり大ほけ小ほけに足腰
痛い
よつこらしよ起つも座るも声を出す八十路となれ
ばなほさらにして
それぞれの倅せ祈りし西東あの日の峠の山桜咲く

スカイツリー

山下 三代子

世界一高いと言はるるスカイツリー楽しみて待っ
上がれるわが身を
余寒なほ去り難き里作東の「かわづ桜」の緋色は
春告ぐ
朝早く裏山に鳴く鶯の「ホーホケキョ」の声ひび
く我が里

獣らと

有元 理嘉子

藪の中を転がるやうに逃げて行く小さき猪の今宵
の糧は
無事なりしか小さき足跡数多あり檻に入りしは我
見ぬ猪か
腹割って話して見たし獣らと何を植うれば君らは
食はぬか

暮しし町よ

横山 美恵子

建ち並ぶ高層ビルの「テグ」の街「陸上」ありて
我は見得たり
「テグ」の街の十二間道路はわかりしが昔の街な
み探せど見えず
韓国の「テグ」といへば幼日に暮しし街よ友はい
づこに

孫娘

原田 順子

雨後明けのまだ薄暗きに白き月見えて「ばあちゃ
ん早く一首を」といふ孫
娘や孫と五十年振りに卓球し昔とった杵柄と言ひ
てほろ負け

「恋花」の話はつきぬ孫娘「おばあちゃんは」に
「これから咲かす」と



書道 妹尾 美智子

梅も桜も

宿野 和穂

文芸の桜小径を鼓笛隊べくべくとやって来る
夢

父母の逝きし齡の三倍も桜の花見の喜びを知る

本陣に泊りし殿も愛でしかや古木に咲ける紅梅の
紅

ゆるわれの幸せ

新免 三代

海拔四百米のわが里の空を一戸の鯉のぼり泳ぐ

屋根までが陰りて潜み往くわれも蟻に見ゆるや山
膨れ来て

「もしもし」が余談話にて果てのなし暇が許すか
溶けゆくしこり

金環食

小林 洋子

花ぞ未だ咲かぬ小径よ並む歌碑に思ひよせつつ春
日を受くる

わが里は留守のごとくに静かなり軒端の乾し物時
折揺れて

わが里に二百八十二年ぶりに見ゆる金環食ぞ眼鏡
は手製ぞ

をりをりに

加百 由紀子

お手本となりし「尊徳」学舎の裏に越しみてひそ
と本読む

壁色となる雨蛙いく日を厨に過ごすや断りもなく

身のほどを知らず太りし「聖護院」抜けば怒れる
如く罅割る

わが村

新田 千晶

幼子の声の途絶えし古い村に鴉が群れ来てカアカ
ア騒ぐ

わが村の真つ直ぐに伸ぶるこの道も窪みもあれば
坂もあるなり

わが村の中央に位置するこの家が空き家となりて
村は危ふし

夏は来たりぬ

末宗 玲子

ばらの街「福山」の初夏は輝けど私の心はブルー
一色

濃き桃の芍薬画面に広がりて心華やく友の絵手紙

朝ごとにうつぎのつばみふくらみて我が荒れ庭に
も夏は来たりぬ

小さき蓬

黒石 初江

草餅を大好きと待つ子のために小さき蓬を手間か
けて摘む

腰痛と獣の害を克服し実らせし稲は夫の力作

ジャガ芋に数多生え来る芽を取れば命を摘み切る
後ろめたさあり

蟬

松井 洋子

蟬の声は重なりあひて跡切れなし我は横たはりて
その精力を聞く

鳴くことに命を賭けし雄蟬はいと潔し定めのまま
に

暑き日を平氣の平左で鳴く蟬よ暗き土の中を覚え
てゐるや

つながり

丘野道子

一音階高き声にて応答する受話器の向こうの友とのつながり
娘に掛ける言葉の裏にはほの見える老いたる母の心もとなさ
子に向かい言わずもがなの言こと負おわす愚かな母に我もなりたり

九十八年

森本久子

九十八年を重ねし我の今日の日をひたすらに祈る
健やかなれと
声かけて人違ひなりしをあやまるにサングラスの
人が声高く怒る
庭先の花それぞれに種散らし時はすぎゆくはや七月ぞ

出番待ち

名部みどり

花柄帯を「おたいこ」に結び嫗らが乙女の如くステージに並ぶ
六十六年前戦につぶれし鳥城の街友が少女で散りし地にたつ
深呼吸に深呼吸す刻々と出番迫る我安らになりゆく

早春

安西苑

早き春光の中に揺れ動き菜の花染むる房総の夕日
畑を打つ我を眺めて娘は言ふ「お婆さんの季節がはやもう来た」と
戦争の終りを告げて六十五年今の平和を重く思ふも

曾孫

光井房子

父の日に「じいじ大好きありがと」と五歳の曾孫の書きしこの字よ
すべり台ですべれることにはまりこみ「帰らん」と泣く二歳の顔きびし
保育園は楽しいと言ふ三歳児ただいまの大声我が家にひびく

老いても

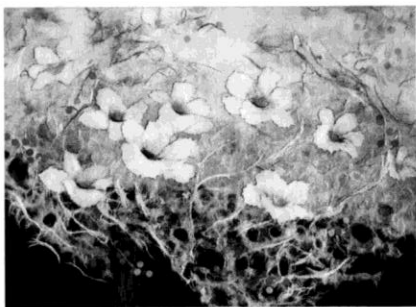
清田三智子

片付けをしをれば出できぬただ一度を花見をしにし夫との写真が
去年まではバイクにて来しが草刈りに何度も休んで一輪車を押し来ぬ
よろよろとしながら苗をさす手には風とさざ波が対むかひてくるか

老いの日々

野沢老梅

八十路なる夫の帰りを待ちわびて車の気配につ立ちてをり
ああ言へばかう言ふ夫婦と娘に言へば口論するもリハビリになるよと
車椅子にて夫と訪ひし金閣寺輝く鳳凰うるみきたりぬ



工芸 岸野三保子

豆植糸

藤川 亜也

起き出でて今日の予定は豆植糸と野良着着こめば味噌汁匂ふ

黒豆と白豆の苗植糸行けば緑の線が八本並びぬ

車窓より豆畑眺めて思へるは麦藁籠につみしゆすらうめ

峡の田

井上 さかゑ

青芽だつ田岸を見つちに田植靴異常なきかと棚よりおろす

山影を水面に映して人居らず鋤の置かれてあすは植うる田

青深く株の間合もうまりきて茂る稲葉を反す雨降る

包まれをりぬ

藤本 伸子

亡き母の歳を越え行く我が命憂ひも悪しきも乗りこえて行く

横田女史の「呆けないように」の講演よ八十余歳にして水も飲まずに

亡き母の古き着物に袖通しその優しさに包まれをりぬ

傘寿の手習ひ

名部 通子

幼児の絶えて久しき我が村に鯉職泳ぐ若きら帰り来て

「いとこ会」とて万葉岬に集ひ来て牡蠣フルコーズに舌鼓うつ

紙一枚鉛筆一本あればいい三十一文字の傘寿の歌詠む

田舎暮し

大内 佐智

大雪の降る事少なき冬なれば五月の棚田の水を憂ふる

街灯に照らされてゐし凍てし道砂金が散らばる如く輝く

秋かなと思へる日のあり虫の音のかすかに混じる野の道を行く

暑い

内藤 慶子

ハアハアと汗水流し野菜採る初経験の都会の子どもら

ハンカチに包む保冷剤古い首の後ろに巻きつけ暑さを凌ぐ

毎日が蕩けるやうな蒸し暑さ交す言葉は「暑い」だけです

天使の響き

池田 保子

招かれてミニコンサートに出で来れば児らの歌声は天使の響き

師と児らで奏づる歌はほのほのとクラスの温もり伝はり来るなり

卒業の春めぐりきて七名の輝く栗井っ子学舎を發つ

さくら

船曳 文子

宇宙より「さくらさくら」と箏の音よ共に弾きたし古き爪はめて

ひらひらと手造り弁当の玉子焼きに花びら入りしよ夫も在りしよ

舞ひ落つる桜の花びら頬打つに負けじと歩む杖音高く

思ひのままに

末宗 千歳

「けんけんばあ」と幼のしぐさを真似みるに土より足の離れぬままなり
ごうろ山の新緑見ては懐かしきを拾ひ集めむか命ある限り
再びは来ざる今日の日わが在るをしかと確かむ梅雨の昼下がり

夫病みをりて

阿部 すみゑ

雑木林を伐つて植ゑにし杉檜売るに売れざり二束三文
農機庫に納むる農機が年々に消えてゆくなり夫病みをりて
名義を替へむ山の境界不明なり知る人は既になく夫は病みをり

米寿をむかえて

加藤 保子

よきことも有りしが重き昭和なり確かに私の生きたる時代
巻き戻し最早かなわぬ歳月と悔やむにあらずただ懐かしき
あれこれと過ぎ来し日々をかえりみぬ戦ひぬきて米寿むかえて

愛無きが如く

角 利津

母われを求めて凭る子を追ひ遣りて店を守りきわれ若かりき
愛無きが如くに育てし子等なれど疾くわれを超え老境に在り
宝物のゴルフ道具を子にやりて夫は笑顔でその子を見送る

踏み出す一歩

角南 三津糸

胸張りて八十路の一步を踏み出せば春の川面に風は光りぬ
師のもとに心交せし歌どちが歩むか花咲く「文芸の小径」を
美作に旧所名蹟あるを知り今更乍ら踏み出す一歩

悲しみとなり

北村 和子

剣つるぎより鋭く私の胸を刺す思ひがけなき人の中傷
ふりかかる火の粉は己で払ふべしわれとわが身を叱咤してをり
怒りつつ涙が頬を伝ふなり怒りはすでに悲しみとなりて

淋しさもある

黒石 登代

牛耳をば執る役ひとつ手放してひと息つきをり淋しさもある
老い染みの増しゆくわれを見下せる遺影の夫は皺ひとつなし
白々と雲引きてゆく飛行機よわが来し方を引くは何色

梅雨晴れ

中川 富美枝

早苗田をやさしく撫でて吹く風よ今日は時鳥の声のせてくる
向う山ゆ吹きくる風よ運び来よ笹百合一輪の花の香りを
大欠伸かくしたる両手にすかし見る山は梅雨晴れ若葉が光る

日食

長澤和枝

眼鏡にて見あぐる日食刻刻と陰りてゆくを息とむるがに観る
篤農家の田植機の音を小さく聞き太陽かくるを無
我に見あぐる
わが残世に観ることなしと日食を見あげてをりぬ
朝七時半

陽炎

日下智加枝

並べぬる二つてのひら娘と孫とどつちがどつちか
この相似形
生きて在らばこの人と母は同い歳つゑに寄りかか
り足を引き摺る
いつからを残生といふアスファルトの道路にゆう
らり陽炎もえて

寒梅

福島美智子

虫偏の生き物達は伸びをして地上の空気に触るる
三月
ほんたうに寒き年なり寒梅は六輪ほどの花しか持
たぬ
食べ尽くせしメロンのやうなる月昇り冬の底ひの
空を見てあつ

子の結婚

浜田くに子

和やかなる会話聞こゆる床の間よ安堵の気持に桜
茶を運ぶ
二十一年十一月十一日の日を選び入籍したる
息子でありし
ころころと笑ふ明るき女性なりわれの息子に寄り
添ふ人よ

今はあり

入矢敏江

こんりんざい言訳なんか聴くものか固いカポチャ
に刃を入れる
白みそを買ひに出て行き帰らないさうして買ふの
を忘れて帰る
待つことも待たるることも今はありほつこりと桜
の蕾がふくらむ

今日もまた

関内惇

今日もまた雑草めらに負けにけり庭ひと隅での戦
ひにして
今日もまた喪中のはがきが届きたり悲しむことを
端折れといふがに
今日もまた終はりとなりぬ一生のひと齣こまなどは
言へぬがままに

霧深く

三浦智江子

宇治川の水流れはやし宇治橋ゆ岸边たどるも浮舟
に遇はず
川と川落ち合ふ町の霧深く阿呆霧よと人ら言ひる
き
水に近く住まむ望みの消えやらずガラスの街の夕
映えの中



生花 池田保甫

グループ活動

グループ活動

それは

作東文化の

底力



手芸 加藤 玲子

作東の短歌会

作東には、次のような三つの短歌会がある。(五十音順)

〈英北短歌会〉

会員数 二十四名

会場 作東公民館

日時 毎月第二木曜日

十三時半～十六時半

〈能登香短歌の会〉

会員数 十七名

会場 粟井教育集会所

日時 毎月第四金曜日

十三時半～十六時半

〈吉野短歌会〉

会員数 十三名

会場 吉野公民館

日時 毎月第一水曜日

十三時半～十六時半

活動内容は、どの会もほぼ同じで毎月、自作を二首ずつプリントしたものを皆で批評し合ったり、推敲し合ったり、助言者の添削を受けたりしながら、更により作品になるよう努めている。

しかし、推敲するためには、それだけの力を備えていなければならないので、その基礎となる作品鑑賞や文法詠を毎回行っている。

作品鑑賞は、主として、日本を代表する歌人の作品を取り上げ、その中から自分の好きな作品を選んで、どこが好きかを発表し合う。文法詠では、助詞の使い方をしっかりと身に

つけるために、例えば「比喩を示す格助詞と」を使い、瑞穂の国と日に異に緑を増す田こそ百姓我らの命なりけれ」などと詠んで発表し合う。

こうした努力のお陰か、皆それぞれ作歌力がついてきて、国民文化祭や各種短歌大会に応募する人が増えてきたし、特選や秀逸にも選ばれることがかなりあるようになってきた。

なお、月一回の新聞投稿、年二回のバレンタインプラザ展示も行っており、今年の春には「文芸愛の小径短歌大会」も開催した。会員一同、この上なく張り切っていて、皆さんの多数の参加をお待ちしているところである。



白雲書道会

私達書道部「白雲書道会」は、里見明（孤舟）主宰の会です。

会員は三十八名（男八名、女三十名）です。

教室は、中央公民館、林野、湯郷、大原、先生宅で行っています。現役でバリバリ活躍されている方、人生の峠を越した者、様々で和気あいあいと頑張っています。

里見先生は「書」を遊び心を秘めた流派にとられない自由な手本を書かれ、その手本によって私達会員は書の研鑽に励んでいます。

他に、真野みよ子さんの阿部書道会、春名直子さんの会があります。



平成23年度 作東文化協会事業報告 1

【全体事業】

年	月	日	事業名	内容
23	3	27	23年度作東文化協会総会	作東バレンタインプラザ
	4	20	第1回理事会	事業計画・会員募集・研修旅行・文化誌編集委員会について
	4	28	文化誌編集委員会	編集委員長選任・編集方針について(以降3回開催)
	5	27	第2回理事会	研修旅行・文化誌原稿募集・秋の文化展について
	5		会員募集開始	会員募集
	7	3	研修旅行	長浜城・江・浅井三姉妹博覧会ほか
	9	2	グループ代表者会議	秋の文化展展示計画
	9	9	第3回理事会	秋の文化展について
	10	7	文化誌37号発行	全会員に配布
	10	29	秋の文化展	作東B&G海洋センターアリーナ ～30日
24	1	27	第4回理事会	春の文化展について・昼食会
	2	10	グループ代表者会議	春の文化展展示計画
	2	13	文化連盟文化祭実行委員会	美作市文化連盟文化祭第3回作品展について
	3	9	第5回理事会	総会提出案件について
	3	24	春の文化展	作東美術館・作東バレンタインプラザ・農村環境改善センター・B&G海洋センター ～25日
	3	25	芸能発表会	作東バレンタインプラザ
	3	25	24年度作東文化協会総会	作東バレンタインプラザ

【支部・専門部活動】

年	月	日	部 名	内 容
23	6	7	江見・豊野支部	江見・豊野支部合同評議員会(会員募集等のお願い・H23年度の事業計画等協議)
	12	10	福山支部	福山支部評議員会
	6	10	粟井支部	粟井支部評議員会
	10	8		春日歌舞伎公演 ～9日
	11	15		粟井支部評議員会
24	2			支部活動助成金配布
23	6	8	土居支部	土居支部評議員会
	6	9	吉野支部	吉野支部評議員会
	11	15		吉野支部研修旅行(耕三寺・平山郁夫美術館)
	10	19		吉野支部評議員会
24	2	29		吉野支部評議員会
23	9	2	書道部	白雲書道会/白雲書道会展(特別展室) ～4日
	4		絵画部	さつき会/日本画教室(月2回開催)
	4	19		奈義美術展 作品展
	6	15		とっとり花回廊研修旅行
	11	25		女美会作品展(津山) ～28日
24	1	7		院展(岡山高島屋)
	2	23		さつき会 作品展(特別展室) ～26日
23	5		水墨・俳画部	プラザ東側展示 水墨画 月2回開催・絵手紙 月1回開催
	3	26		作東絵画教室(油彩・水彩)/春の書画展 ～27日
	5	1		春の絵画展(交流展) ～5日
	9	7		岡山県美術展出展
	10	19		バレンタイン愛の美術展出展 ～23日
	11	12		板井原(鳥取)ヘスケッチ旅行
	11	12		しんわ美術展出展 ～21日
	11	12		勝山いとこみつけた展出展 ～25日

平成23年度 作東文化協会事業報告 2

年	月	日	部 名	内 容
23	1	21	工芸部	むつみ会/新年会・第1回作品作成
				作品作成(月2回開催)
	5	24		江見ちぎり絵教室/夢二郷土美術館へ研修(色彩と構図)
	12	3		総会
				ちぎり絵教室 年11回開催
	4			福山ちぎり絵教室/山の学校ロビーに於いて、展示
				ちぎり絵教室 年10回開催
	5	24		研修旅行(岡山美術館・バラ園)
	12	4		江見ちぎり絵教室と交流会
				ちぎり絵がらびの会/ちぎり絵教室 年10回開催
	9	12	茶華道部	お月見茶会(作東公民館)
				ひまわりの会/作東公民館 月2回
	4		写真部	春景撮影
	5			鳥取芦津溪谷
	6			プラザ展示準備 ～7月
	8			プラザ展示
	9			文化展出品準備 ～10月 波賀町撮影会 福知溪谷撮影
	11			佐用郡展応募 ～12月
24	1			年間計画・春の書画展出品打ち合わせ ～2月
23			情報映像部	パソコン講座 粟井地区センター(毎月第3木曜日)
			芸能部	第7回作東文化協会 芸能発表会
				吉野ハピネス(大正琴)/月2回
				あずさの会(大正琴)/月2回
				早瀬流剣詩舞道/月4回
				作東吟詠愛好会/月2回
				コール作東/月2回
			歴史部	歴史地名研究会/毎月定例会
			文芸部	山家川俳句会/各月の最終土曜日・定例会
				川柳/例会 偶数月第2水曜日開催、新聞発表
				英北短歌会/定例詠草会 月1回
				能登香短歌会/定例詠草会 月1回(原則第4金曜日)
				吉野短歌会/定例詠草会 月1回

【連盟事業】

年	月	日	事業名	内 容
23	6	19	美作市文化連盟第4回芸能発表会	作東バレンタインプラザ
	4	3	日本舞踊連盟第3回発表会	美作文化センター
	10	23	美作市吟剣詩舞道連盟創立5周年記念大会	美作文化センター
24	3	24	美作市文化連盟文化祭第3回作品展	作東バレンタインプラザ ～25日

作東文化協会 グループ紹介

部 名	グループ名	種 別	代 表 者 名	指 導 者 名	例 会	場 所	展 示 会 等	作東文化協会会員			合 計
								作東地区内	作東地区外	未加入者	
書道部	1 白雲書道会	書道	北村福作	里見明	月2~3回	作東公民館他 里見明先生宅	白雲書道会展	22人	14人	1人	37人
	2 書春名	書道	春名直子	春名直子	月3回	角南公会堂 西町コミュニティ他		5	1	2	8
	3 阿部書道会	書道	真野みよ子	阿部正登(雲魚)	月1回	岡山市北区伊島町阿部雲魚宅	県北展等	3	1		4
絵画部	4 作東水彩画教室	水彩画	妹尾美智子	竹中信清	月1回	作東農村環境改善センター	春の絵画展・スケッチ展	8	5		13
	5 作東油彩画教室	油彩画	妹尾美智子	竹中信清	月2回	作東農村環境改善センター	春の絵画展・スケッチ展	7	5		12
	6 さつき会	日本画	寺師喜代美	井上美智江	月2回	井上先生宅	作東美術館特別展示室で作品展	9	3		12
	7 土居すみ絵	墨絵	小林艶子	岩本敏子	月2回	J A勝英作東支店土居営業所		8	1		9
	8 彩の会	絵手紙	木南節子		月1回	瀬戸コミュニティハウス		6			6
	9 すみれ会	絵手紙	岩本敏子	岩本敏子	月1回	岩本先生宅	春・秋展示会・プラザ東側展示	7	1		8
	10 こぶしの会	油彩画	田中佳栄子	権田直良	月2回	勝英農協作東支店会議室	作東美術館で作品展	7	1	1	9
園芸部	11 作東盆栽会	盆栽	青山巖	青山巖	年2回	美作地域交流センター	梅花展・秋の盆栽展	4	13	4	21
茶華道部	12 ひまわりの会	華道	中田敏子	中田敏甫	月2回	作東公民館		10			10
	13 茶の湯同好会	茶道	谷本津多江	谷本津多江	月4回	作東公民館	お月見茶会	10			10
文芸部	14 英北短歌会	短歌	横山猛	関内惇	月1回	作東公民館	プラザ展示 2回・新聞発表 月1回 文芸愛の小径短歌大会 年1回	16	8		24
	15 能登香短歌会	短歌	松井洋子	関内惇	月1回	粟井教育集会所	プラザ展示・山陽新聞発表(隔月 年6回)	17			17
	16 吉野短歌会	短歌	新免三代	関内惇	月1回	吉野公民館	ペイネ・山陽新聞社	12	1		13
	17 山家川俳句会	俳句	山本登	小島宇人	月1回	福山地区福祉センター	土居小学校に展示	16			16
	18 作東川柳同好会	川柳	原洋一	原洋一	年6回	作東総合支所第1会議室		15			15

作 東 文 化 協 会 グ ル ー プ 紹 介

部 名	グループ名	種 別	代 表 者 名	指 導 者 名	例 会	場 所	展 示 会 等	作東文化協会会員			合 計
								作東地区内 人	作東地区外 人	未加入者 人	
歴 史 部	19 歴史地名研究会	地名研究	新 田 祐 之	固定した指導者は、 なし。地域の高齢者 又は郷土史家	月1回	作東公民館他 地域の集会所	展示活動は行わず	16	5		21
	20 古文書を読む会	古 文 書	真 野 みよ子	安 東 靖 雄	月1回	作東総合支所第1会議室		10	2		12
写 真 部	21 写真同好会写友	写 真	小坂田 貢	小 玉 司	年3回	撮影会(野外) 写真のこだま	プラザ展示・佐用美術展出展	11	1		12
芸 能 部	22 吉野ハピネス	大正琴	小 林 美農里	富 永 仁 美	月2回	吉野公民館		11	5		16
	23 琴伝流大正琴あずさの会	大正琴	岩 本 敏 子	藤 谷 守	月2回	J A勝英本店	全国大会・各地のイベント参加 福祉施設へのボランティア	6	4		10
	24 舞 の 会	剣 舞 日本舞踊	石 川 八千代	安 原 鯉 舟	月3回	作東公民館		11	1		12
	25 作東吟詠愛好会	詩 吟	御 前 孝 子	光 辻 猛 美	月2回	各地区公民館		32			32
	26 コール作東	コーラス	池 田 保 子	池 田 直 美	月2回	作東公民館		25	1		26
工 芸 部	27 江見ちぎり絵教室	ちぎり絵	末 宗 順 子	杉 本 幸 子	月1回	作東公民館		6	1		7
	28 福山ちぎり絵教室	ちぎり絵	香 山 満寿子	杉 本 幸 子	月1回	万善地区センター		6			6
	29 江見陶芸部	陶 芸	中 川 幹	田 代 宗 保	月1回	作東公民館		9			9
	30 む つ み 会	押 絵 ちぎり絵	山 本 津多江	山 本 津多江	月2回	白水横林 原コミュニティ		10			10
棋 道 部	31 双山囲碁クラブ	囲 碁	横 山 廣 志	横 山 廣 志	月3回	作東老人福祉センター 環境改善センター		29	84	84	197
情 報 映 像 部	32 お達者ねっと倶楽部	インターネット	鳥 形 初 美		月1回	粟井地区センター WEB上		10			10
手 芸 部	33 編物手芸教室	手あみ 各種手芸	妹 尾 さと子	妹 尾 さと子	月4回	作東公民館		19			19
	34 ビーズを楽しむ会	手 芸	妹 尾 さと子	西 坂 暁 子	月1回	作東公民館		14			14

407人 158人 92人 657人

編集後記

『作東の文化』第三十八号が今回も会員多数の投稿と特別寄稿により刊行できましたこと、編集委員一同、感謝いたしております。

今年も特別寄稿として上福原出身の岡山で活躍されております岡田千茶氏と当文化協会の顧問としてご指導ご支援をいただいております里見明氏より玉稿をいただきました。心よりお礼申し上げます。

昨年から掲載を始めましたグループ活動では、今年は「短歌の会」三グループと「白雲書道会」の活動を紹介しております。この活動紹介によりご賛同をいただき、会員の増加を期待したいと思います。

また、歴史紀行の「江見神社の由来」をご投稿いただいた川北の宿野喜一氏は今年九十五歳の天寿を全うし、他界されました。そこで、遺稿として今号に掲載させていただきましたので、ご一読いただき、故人を偲んでいただけたらと思います。

宿野さんは、幅広い分野において当文化協会の事業で活躍され、特に「作東の文化」誌には毎回投稿をいただいております。

ここに誌上をお借りし、謹んで哀悼の意を表しますと共にご冥福をお祈り申し上げます。

編集委員会

作 東 の 文 化

第 38 号

平成24年10月15日発行

編 集 作東文化協会文化誌編集委員会
(美作市教育委員会 社会教育課)

編集委員 安東 靖雄 梅澤 紀之 小林 秀雄
内藤 善晴 新田 祐之 原 洋一
春名 貞和

発行所 作 東 文 化 協 会
岡山県美作市教育委員会 社会教育課内
TEL (0868) 72-2900 〒709-4292
HPアドレス <http://bunka.boj.jp/>

印刷所 株式会社 廣陽本社
岡山県津山市田町22